

第14回全日本高校模擬国連大会【書類課題講評】

グローバル・クラスルーム日本委員会 2020年度 選考統括 吉野光陽
副選考統括 湯ノ口慧
研究主任 井原渉

この度は、全日本高校模擬国連大会に多くの参加申し込みをいただき誠に有難うございました。本年度は延べ 219 チームにご応募いただきました。皆さんに提出いただきました書類課題につきましては、1ヶ月弱の時間をかけ、10名の選考員で審査いたしました。その結果を踏まえ、11月に開かれます本大会に出場いただくチームを本日、この講評と共に発表させていただきました。

選考結果を受け、安堵するチームがある一方で、行き場のない悔しさを噛みしめるチームも少なくないことと思います。全てのチームにとって、この選考結果が大きな意味を持つものであることは想像に難くありません。しかし書類選考課題の作成・審査を統括した立場としては、この書類課題に取り組んだこと、それ自体が皆さんにとって価値ある経験であって欲しいと願っています。

本講評では、本年度の課題に込めた意図や評価ポイント、そして審査を踏まえた所感をお伝えさせていただきます。少し長くなっていますが、結果の如何に関わらず最後まで目を通していただき、次の成長の種を1つでも見つけていただければ幸いです。

【書類課題作成の方針】

本年度は例年以上に、「模擬国連大会に出場するための選考」ということ意識して書類課題を作成しました。書類・文面という制約のある中でも可能な限り、「模擬国連の活動に関連するような能力」を測ることで、本大会において全国大会に相応しいハイレベルな議論が展開されることを狙いました。そこで、本大会に出場するにあたって備えておいていただきたい能力を抽出し、それらを測るための4つの設問を用意しました。

また本年度は問題で扱うトピックを1つに絞らず、設問毎に異なるトピックを設定しました。様々な能力を評価するためという理由もありますが、国際問題に早期から関心を寄せる皆さんにより幅広い国際問題について考えて欲しいという思いから、全く異なる4つのトピックを設定しました。温室効果ガスの問題など広く周知されたものに対して、新たな気付きや発見が得られるような問題設定に工夫しました。

例年に比べて少しボリュームのある書類課題と感じた方もいたかもしれませんが、答案作成を通じて、少しでも自身の興味の広がりや知識の深化を感じていただけたら幸いです。

【問1】

参考論文¹を読み、「4. ソーシャルメディアがもたらした2つの革新的変化」において挙げられている、「動員の革命」と「透明性革命」とはいかなる変化であり、それぞれどのような問題があると指摘されているか、筆者の見解をまとめなさい。(300字以内)

○出題の意図

第1問では、「資料読み取り能力」と端的に要点を説明する「作文力」を測ることを目的としました。

模擬国連においては、そのリサーチにおいて様々な文献を探索する必要があります。多くの文献は内容が平易なものではなく、理解に苦勞することも少なくありません。しかしながら、幅広い文献にあたりそれらを正確に理解しておくことは、会議の議論における優位性を大きく左右します。そこで本設問では比較的内容の難しい学術論文を基に、筆者の考えを読み取るという問題を設定しました。

また300文字と文字数を抑えることによって、限られた文字数の中で真に重要なポイントを正確に伝えることができるのか、という点を見させていただきました。要点を簡潔に伝えるということは、議論する上で大切なことです。そこで議論中のコミュニケーション力を、300文字の中での作文力を通じて評価することにしました。

○主な評価ポイント²

- ✓ 「動員の革命」「透明性革命」の2つについて、それぞれの「変化」を説明することができているか
- ✓ 筆者の考える2つの革命の問題点を正しく理解した上で、本質的な問題について言及することができているか
- ✓ 日本語として、読み手に正しく伝わる文章になっているか

○講評

第1問は国語の現代文に近い問題であり、多くのチームが一定の得点を獲得することができていました。差がついたポイントとしては、2つの革命が抱える問題点の説明でした。参考論文において筆者がどこで問題点について言及しているのか、という点についてはおそらく容易に見つけることができたと思います。ここで重要なのは、問題の核心をしっかりと捉えられていたかという点です。例えば、「動員の革命」の問題点について「政治的責任を

¹ 山本達也 (2016) . 「インターネット時代における情報と国際政治をめぐる諸課題 ～国家安全保障と民主主義的価値をめぐるジレンマ～」 . 『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』 .24, pp.229~246

² 主な評価ポイントであり、全てを網羅するものではありません。(以下の問も同様)

伴わないまま、気まぐれに現れたり消えたりすること」としている回答が複数見られました。確かにこれは問題点の一要素ですが、これだけで問題点を語るには不十分であると言えます。より本質的な問題に迫る必要がありました。

それは本当に「問題」なのか、と疑う目を持つことは非常に重要です。模擬国連の会議においても、他国の問題提起・反論が本質的なものなのかという視点で捉え直してみると、そこに議論の余地があることは珍しくありません。これは模擬国連に限らず、社会でもしばしば見られる光景だと思います。世間で問題だと騒がれていることを俯瞰して、「誰にとって、どのように問題なのか」と冷静に分析してみると本質的な問題点が別にあることに気づくことができるかもしれません。

【問2】

上記の二カ国の常任理事国の議席拡大に対する主張を踏まえ、日本大使・カナダ大使のいずれかの立場を選び、他方の主張に対して論理的に反論を行いなさい。ただし、反論は上記の主張要点の内容以外について言及してはならない。(400字以内)

○出題の意図

第2問では、与えられた資料に反論をするという形で「批判的観点から資料を読み解く力」と的確な反論を組み立てることで「論理的に主張できる力」を測ることを目的としていました。

模擬国連会議の最終成果として決議案作成を行うことは、会議における一つのゴールとして存在しています。決議案に記載されてある文言には意味があり、それは各国の思惑が明示的に反映されているものとも言えるでしょう。文章の持つ意味を正確に分析することは、各国の国益や合意を導く糸口を掴むことにつながります。今回の問題では、日本、カナダのそれぞれの公式発言を分析してもらうことで、文章の持つ意味を正確に把握する力を評価しました。

また会議において、相手の主張に対して論理的な反論を行うこと、また相手の主張の意図やポイントを正確に把握することは必要不可欠な能力です。他国との交渉において、相手の主張の穴をつくこと、あるいは相手の主張の要点を掴み、相手の要求を把握することで、自国にとって優位な形で会議を進めることができます。そこで相手の主張に対して反論を行うという実践的な形式で、論理的に主張をする力を測る問題を設定しました。

○主な評価ポイント

- ✓ 正確に反論すべきポイントを見極められているか
- ✓ 論理的飛躍のない適切な反論ができているか
- ✓ 反論点を抽出し、それに対して反論を行うという形式をとれているか

○講評

第2問は公式発言から意図を読み取り反論するという難問であり、全体的に得点率も低く高得点の答案もかなり少なかったです。そのためミスが差を分けるのではなく、どれだけ基礎的な部分を落としていないかで差が生まれました。

まず反論すべきポイントを正確に掴むことが必要です。資料の公式発言や主張要点は様々な要素やテーマについて触れています。しかしこれらに対して闇雲に取り上げていくのではなく、どの部分について反論を行なっていくべきなのかを吟味する必要があります。

そしてその後に必要なのは資料の情報をもとに論理的な反論を行うことです。この問題で取り上げられているテーマは安保理改革であり、模擬国連を経験している人にとっては比較的馴染みのあるテーマであると思います。そのため前提知識を有している方も多かったと思いますが、ここで意識すべきなのは与えられた情報から反論をするという点です。答案の中で多かったのは、既存の知識をもとに、G4やUfCなどの国の立場から主張を行っているというものでした。しかし担当国の立場から主張を行うことと、相手の主張を受け止めてそれに対して反論をするということは、似て非なるものです。そのため今回の問題の趣旨を理解し、単なる知識の羅列ではなく、相手の主張をベースに作成された答案が高得点を獲得しています。相手の主張に対して単に自分の主張をぶつけることは、議論が噛み合わず平行線になる典型的な例です。これを今後、模擬国連やディスカッションをする機会に意識をすることで、議論の軌道修正や質の向上につながるはずです。

【問3】

- (1) 環境省が発表した「2018年度温室効果ガス排出量（確報値）³」によると、2013年度の排出量が14億1000万トンであったのに対し、2018年度の排出量は12億4000万トンとなり、2018年度までに2013年度比-12%の排出削減を達成している。この事実を踏まえ、環境省の「2018年度温室効果ガス排出量（確報値）」に基づいて、2013年度から2018年度までにCO₂の排出削減に最も資した排出部

³ 環境省（2020）「温室効果ガス排出・吸収量算定結果『2018年度（平成30年度）温室効果ガス排出量』」

門を特定し、それを特定した理由とその削減の背景を述べなさい。(300字以内)

- (2) 日本の中間目標を踏まえると、残り14%（2013年度比）の削減を達成しなければならないことが分かる。この残り14%を達成するために、日本はGHG排出をどのように改善しなければならないだろうか。2018年度における現状を踏まえ、14%の削減を実現する上で、あなたが最も改善されなければならないと考えるCO₂排出部門を一つ挙げ、理由を述べなさい。部門を選択する際には、その部門の内訳を分析し、改善の実現可能性も考慮すること。(600字以内)

○出題意図

第3問では、資料（統計データ）を読み取った上での「分析力」とそれらに基づいた「課題特定能力」を測ることを目的としました。

問1でも資料を読み取る力を評価しましたが、問1との違いとしては、設問に答えるために各種のデータ・数値を解釈し、適切な示唆を見出す「分析」の工程が必要であったという点です。模擬国連のリサーチにおいては、自分が知りたい情報がピンポイントで見つかることはあまり多くありません。そのような場合においては、資料から間接的に示唆を導く、又は複数の資料から複合的に示唆を導くなど、独自の分析を行うことが大切です。そのような分析の有無やその深度が自国の政策の洗練さを向上させたり、議論における有効な裏付けになったりすることに繋がります。そのことを踏まえ、問3においてはGHG排出に関する定量データを用いて回答する問題を設定しました。

また(2)においては、資料の分析に加え、解決されなければならない課題（部門）の特定を行っていただきました。これは模擬国連における政策立案の能力の一部を測ることを意図しました。政策立案においては、解決したい問題のボトルネックに的確にアプローチしていることが重要です。また、解決すべきボトルネックを特定するにあたっては、その解決の「インパクト（解決する意義はあるのか）」と「実現可能性（解決することが可能なのか）」を考慮していることが理想的です。前者に関しては大抵の場合において考慮することができていますが、後者がおざなりになっていることがあります。このような背景から、解決すべき課題の特定を適切に行うことができているかという点を評価する設問にしました。

○主な評価ポイント

- ✓ 設問が問うていることを正しく理解し、それに対して適切な回答ができているか
- ✓ データ・数値が表す意味を正しく解釈することができているか
- ✓ 改善のボトルネックを適切に見つけ出すことができているか
- ✓ 実現可能性を論理的に説明することができているか

○講評

(1)については他の設問に比較して多くのチームが高い評価を得ることができていました。一方で(2)については、大きく差がついた設問となりました。差がついた要因としては、設問の問うていることに答えていたか否かという、初歩的な部分であったと考察しています。

この設問が要求していたのは、あくまで「最も改善されなければならないと考える CO₂ 排出部門」を特定するということです。しかしながら多くの回答において、「具体的にどのように改善するのか」という政策・施策が回答の主軸になっていました。それは設問の問うところではありません。確かに、実現可能性を裏付けるにあたって具体的施策に言及することは適切な論理展開であると言えます。しかし、それに 600 文字の大半を割くことはあまり適切ではありません。この設問の回答においては、「残り 14%の削減という前提条件を考慮した分析を行い、選択した部門の改善のボトルネックを特定し、その実現可能性を示す」という大きく 3つの要素が等しく重要でした。

ここからは私の推測になりますが、おそらくこの問題に取り組んだ誰もが、最初は問題文を適切に理解できていたのではないのでしょうか。しかし、回答を作成するうちに実現可能性の話に注力してしまい、結果的に論の主軸が具体的な施策になってしまった。このようなパターンのチームも少なからず存在すると思います。これは会議にも通ずる部分があるのではないのでしょうか。

議論は「発散」と「収束」を繰り返しながら展開するものと言われます。最初は明確だった論点が、議論を進行するうちに複雑化し一体どこに帰結すれば良いのか分からなくなるということは会議においてしばしば発生します。これは議論が一方向的に発散してしまい、適切なタイミングで、適切な方向性に収束できていないことが原因と考えられます。議論は発散しがちなものであるからこそ、今どこに向かっているのかということを強く意識して議論を正しい方向に収束させていくことが肝要です。是非、今後模擬国連の会議に参加するときはそのようなポイントを意識して取り組んで見てください。

【問 4】

とある A 国の同盟(the alliance of country A)と B 国の同盟(the alliance of country B)が存在しており、両者は今にも戦争を起こしかねないほど緊張状態にあるとする。A 国、B 国はともに軍事・経済両面において大国であるが、現状 A 国の同盟の方が B 国の同盟より強大な力を有しており優勢である。現在、第三国の C 国(country C)は A 国の同盟か B 国の同盟のどちらかに加わることを検討している。

この状況において、C 国はどちらの同盟に加わるべきだろうか。C 国が軍事的・経済的大国である場合と中小国である場合の 2 つについて、どちらの同盟に加わるのがより優れた判断であるか、その理由とともにそれぞれ述べよ。ただし、上述したこと以外の要因

は考慮しないものとする。(各100語以内)

○出題の意図

第4問は、英語問題を設けることで「英語力(特にライティング)」を測ると同時に、与えられた新規の情報に対する「論理的思考力」を見ることにも重点を置いた問題でした。

まず模擬国連において、スピーチや決議文作成など、英語を使わなければならない局面がいくつかあります。そのため最低限度の英語力はどうしても必要です。この設問は皆さんの英作文能力を測ることを目的の一つに設定しました。

ただしこの設問は単純な英作文問題ではなく、思考力が試される問題でもありました。会議の間は常に思考をし続けることが求められます。交渉や文言作成は目まぐるしく変化し、自分の予測とは異なる事態が起きることも珍しくありません。不測の事態に対処することができず思うように動けなかった場合、会議で成果を挙げることは難しいでしょう。重要なのは新たな事態や状況に対して常に思考を巡らせ、最適な手段を模索し続けることです。本問ではおそらくほとんどの方が触れたことのないテーマを用いて、既存の知識ではなく自らの論理的思考力によって答えを導き出す力を評価させてもらいました。

○主な評価ポイント

- ✓ 正しいライティングスキルを身につけているか
- ✓ 与えられた情報に対して正確な分析ができているか
- ✓ 100語以内というかなり限られた制限の中で、端的かつ論理的な答案を作成できているか

○講評

第4問は国際政治理論をテーマとした難解な問題であり、点数の獲得は難しいと予測していたのですが、健闘している答案が多かったように感じます。

まず英作文力についてですが、文法ミスや表現の誤りによる大幅減点がなされている答案はほとんどなく、概ね問題はありませんでした。ただ難解な文法や語彙を用い過ぎたために、時制のミスを引き起こしてしまうなどの減点が目立ちましたので、短くまとまった読みやすい答案を心がけると良いでしょう。

次に内容面についてです。まず同盟の選択肢をそもそも間違えている答案も散見されましたが、想定よりは少なく、比較的多くの答案が正しい答えにたどりついていたことは素晴らしいと思います。後の理由説明についても言えることですが、ある選択肢を選んだ場合にどのような事態が発生しうるかを想定し、思考を重ねることが、最適解を導く上で重要なプロセスになります。

そして理由説明についてです。答案の中に多かったのが、国際社会に平和をもたらすために重要な案を提示するという観点から理由説明を行うというものでした。もちろん結論から言うと、国際社会の安定という観点が答案作成のヒントとなるというのはその通りなのですが、ここで問われているのはC国にとって利する選択とは何か、ということです。C国にとって利する選択とは何かを突き詰めた結果、国際社会の安定へとつながる場合は問題に正確に回答していると言えます。しかし単に国際益を維持する観点から思考を巡らすことは、C国の視点からではなく、第三者視点から問いに答えていることになり、大使としては不適當です。題意を正確に把握しそれに答えることは、今回の問題に限らず問いに答えるにあたっての基礎ですが見落としがちなポイントです。相手の要求からそれてないか常に気をつけることで、的外れな反応をしてしまうことを防ぐことができますでしょう。

【最後に：書類課題に取り組んだ高校生の皆さんへ】

以上をもって、書類選考課題に関する講評とさせていただきます。4つの設問に込められた様々な意図とそこから我々がどのような能力を評価していたのかということ、ご理解いただけたでしょうか？高校生に対してレベルの高い内容を求め過ぎなのではないか思った方もいらっしゃるかもしれません。しかし、自分の実力を実感し、理想とのギャップを認識しているということは、自身の能力をさらに高めるための重要な一歩を既に踏み出している証だと思います。そこからさらに前進することができるか否かは、皆さんがそれぞれどのようにそのギャップを埋めるかという点にかかっています。

この模擬国連という活動を通して身につけられる多様な能力は、模擬国連という枠組みを外れても、非常に価値あるものであると思います。そうであるからこそ、この書類選考を通じて感じたギャップを埋められるよう努力を重ねて欲しいと思います。選考の結果に関わらず、そのチャンスは皆等しく有しています。この書類選考が少しでも多くの皆さんにとり、今後の成長の原点となれば幸いです。皆さんの今後の益々のご活躍を切に願っております。ありがとうございました。

選考に関する個別の問い合わせは一切お答えできませんので、ご了承ください。